Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-25

趣旨説明

松嶋, 登

(Citation)
神戸のSTS：スプリング８をめぐるサイエンス・ベースト・イノベーション研究と低線量被曝の歴史研究:9-11

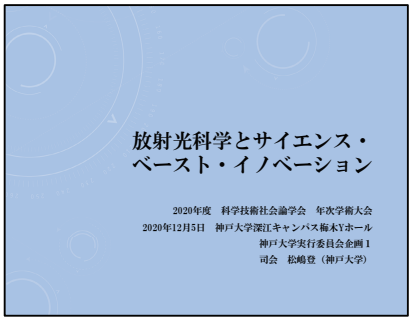
(Issue Date)
2021-02

(Resource Type)
book part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90007909

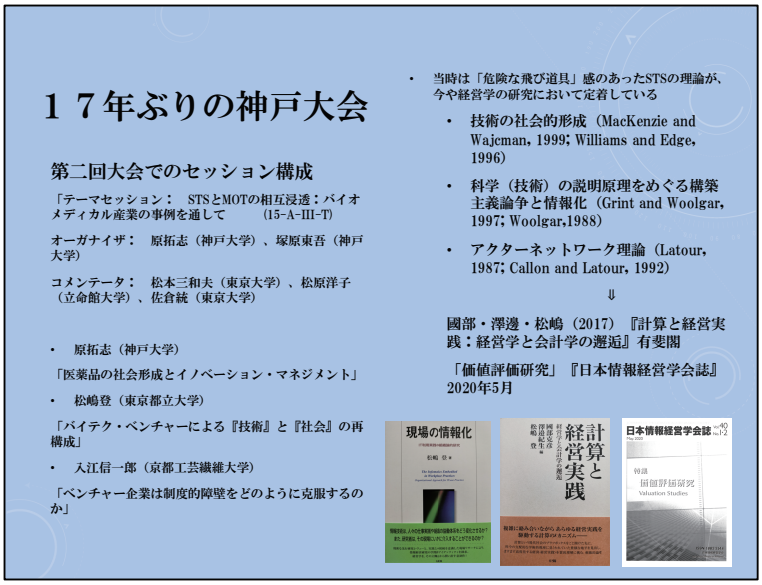
神戸大学実行委員会企画１
放射光科学とサイエンス・ベースト・イノベーション
松嶋登（神戸大学）



松嶋：神戸大学の松嶋でございます。どうぞよろしくお願い致します。このセッション、本来は報告者の方に集まっていただいて、リアルタイムの中継をする予定でしたが、コロナの影響で、神戸大学の関係者にはリアルに集まっていただき、遠方の方にはリモートでご参加いただくハイブリッドセッションになっております。場合によっては不手際があるかもしれませんけれど。新たなチャレンジということで、ご寛容いただければと思います。

このセッション、「放射光科学とサイエンス・ベースト・イノベーション」という、経営学者が企画させていただいた実行委員会企画でございます。実は、17 年前の神戸大会で同じように経営学からの STS セッションを持たせていただきました。改めて振り返りまして、17 年前が本学会の草創期にあたる第二回大会であったということに改めて気づきました。当時、私は、神戸大学の経営学研究科を修了したばかりの若手でございました。17 年前の第二回大会のセッション構成は、このようなかたちでした。そのときは、塚原先生にオーガナイザーをお務めいただいて、今は関西大学に移籍された原先生もいらっしゃいました。私も前任校の東京都立大学専任講師の肩書で報告させていただきました。

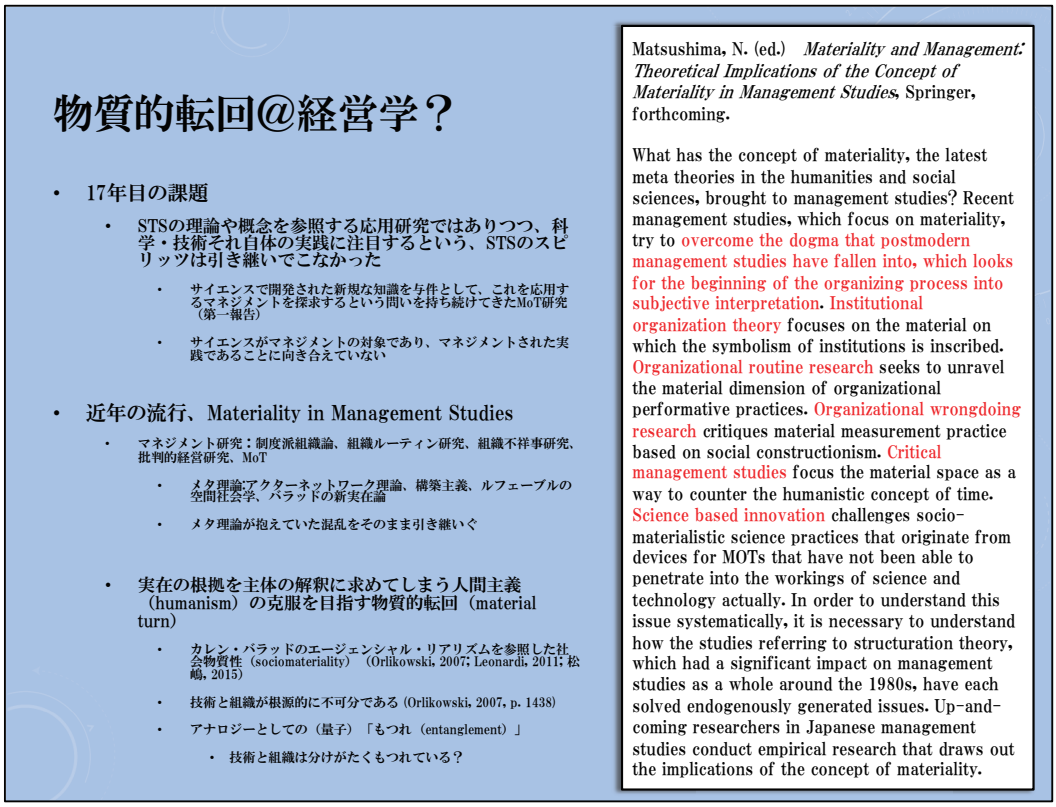
今回、私が座長として新しいセッションを企画させていただいたわけですが、当時の経営学において STS 理論というのは、どこか「危険な飛び道具」というか、新しすぎて「それ、経営学に持ってきて本当に大丈夫なの？」っていう懐疑的な意見もあった、そんな時代でございました。



原先生は、MacKenzie の「技術の社会的形成」に依拠されたご研究をなされており、私は、Woolgar の構築主義であったりとか、Virtual Society の議論なんかに影響を受けて学位論文を仕上げ

た直後であります。京都工芸繊維大学の入江先生は、Callon や Latour らによる「アクター・ネットワーク理論」を経営学に取り入れるチャレンジを報告していました。しかし今や、それらはもう当然ながら経営学の理論として根付いております。そういう意味では、我々のセッションは、先見的でありつつ、間違っていなかったなと振り返られるわけです。

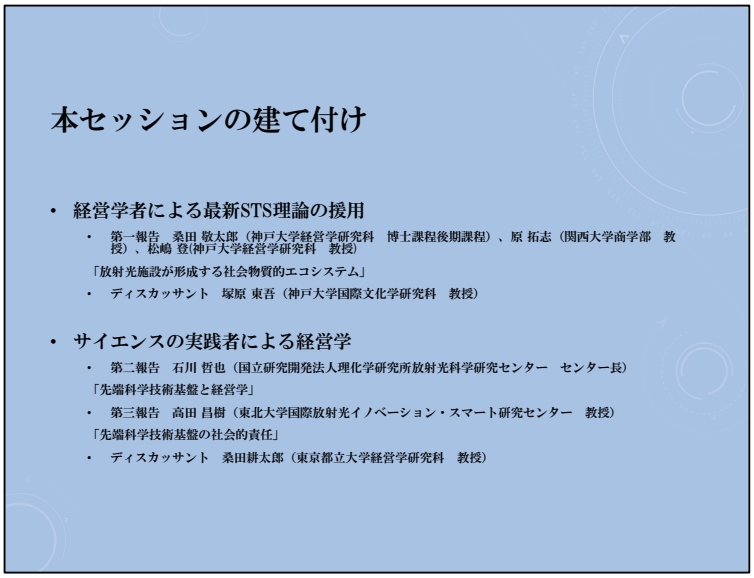
しかし、17 年目の課題として、本当に経営学は本当に STS の理論を使いこなせているのだろうかという課題設定を行いました。確かに STS の様々な理論は、今や経営学で当たり前に利用されています。しかし、どちらかと言うと、それはアナロジーとして引用されることが多く、本当にその理論的含意の神髄というのは分かっているんだろうかというところが、実は疑問な研究も多いのも確かなわけです。これから第 1 報告で桑田敬太郎くんに報告してもらいますが、その一つにフェミニストであり、量子物理学者の Barad による entanglement 概念などは、最近、よく経営学でも引用されてております。これは「もつれ」というふうに解されているわけなのですが、「要するにもつれてるんです」っていうふうな説明を聞くと、そんな雑な使い方で良いのかと。言うなれば、「もつれてるのは、お前の頭なんじゃないか」っていう冗談がよく言われているわけでございます。今、経営学でも STS の理論的動向でも見られる物質的転回がブームで、経営学の様々な領域で様々なメタ理論を援用した議論が始まっており、じつはメタ理論の側の混乱に引きずられて様々な混乱が見られる状態なのですが（その文献展望と日本の若手研究者による経験的研究をまとめた著書を出版準備中です)、その本当の意味合いは何なんだろうかっていうことを真剣に考え



てみたい。17 年目の経営学における STS の可能性について、改めて再点検をしたいというのが、このセッションの目的でございます。

最後に、本セッションの建て付けだけ、説明させてください。今回のセッションですが、２つのパーツに分かれます。第一部が、経営学者による最新 STS 研究の援用ということで、これが第一報告です。先ほど申し上げました、Barad の新実在論を代表として議論されている物質的転回が、経営学においてどういう意味があるのか。これに対して、STS 論者の塚原先生からコメントをいただく。これが一つ目のパーツです。

続く第二部がですね、これ少し面白い着想だと思っているのですが、経営学者が参照する Karen・Barad 自身はフェミニストとして STS 論者であるわけですが、量子物理学者でもあるわけです。従いまして、STS 研究者の理論を援用するだけじゃなく、量子物理学者、サイエンスの実践者による経営学っていうのを逆に考察してみてはどうかというチャレンジであります。それが、第二報告でご報告される、Spring-8 を擁する理化学研究所のセンター長の石川先生であり、それから第三報告でご報告される、東北大学で新しい放射光施設を立ち上げられている高田先生です。彼らの、物理学者の実践、サイエンティストの実践から見た経営学をご報告いただきます。それに対して、経営学者の重鎮である桑田耕太郎先生に、経営学的含意を討論いただくという建て付けで、今回のセッションを組ませていただきました。



謝辞

この文理融合型のシンポジウムの開催は、以下の助成を受けたものです。

JSPS 科研費 18K01836「サイエンスが浸透した社会におけるイノベーションの理論基盤の整備と経験的研究」

神戸大学社会システムイノベーションセンター研究プロジェクト「物理学実践の解明を通じたイノベーション・マネジメントの探求」